
まだ見ぬ嫁の為に

マスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ見ぬ嫁の為に

【Nコード】

N8889Y

【作者名】

マスター

【あらすじ】

ハンターハンターの世界に二度目の人生を得た主人公が、将来誕生するであろう嫁獲得を目指し遙たかみを目指す。

目的達成の為ならば、原作主人公一行すら利用する覚悟。なぜなら、嫁獲得に一番の障害になるのはゴンとキルアにほかならない。

そんな、欲望に素直な少年が健気に生きる日常を描いた物語。

主人公の名前が、作者の前作と同じですが、全く、関係ありません。

第1話（前書き）

漫画連載に伴い作者の中で再び熱が付いたので、ハンターハンターのSSを書いてみることにしました。

誤字脱字等は、なるべく気を付けておりますが今までの実績上取り切れてない可能性が大です。

先に謝らせてください。

読み汚し申し訳ありません。

では、再びよろしくお願い致します。

主人公の名前は、作者の前作と同じですが、一切関係ありません。転生特典などはありません。

第1話

今年で4歳になるが、こんな世界に生まれなくなかったと思っていた。

誰が、好き好んで人の命が紙屑みたいな価値の世界に転生しなきゃいけないのだ。

出来る事ならば、人が死なない世界に転生したかった。出来る事ならば、学園物などが理想だ…あえて例を言うならば『TO LOVE E〇』とか『アマガ〇』などがよかった。原作は、読んだ事が無いのでよく知らないが、かなりリア充的な展開が期待できただろう。

『本日、ハンター協会のネテロ会長が…』

TV放送で一番聴きたくない単語が流れた。

そう…この世界は、HUNTER×HUNTER!!

日常を送るには、とても辛い世界。

非日常を過ごすには念能力と呼ばれる超能力紛いな物が必要な世界。だが、それでは、お腹を痛めてまで私を生んでくれた両親に申し訳ないと思い。最近では、考えを改める事にした。

そこで、アリ編までしか原作を知らない私が必死に考えた人生プランがこうだ。

? 念能力の取得
?
? グリッドアイランドの『支配者の祝福』を入手!!
? ネフェルピトーを嫁として確保!! 実際、一番重要な目標
? ハンター試験合格

正直、自分でも無理な課題を挙げたなと思う。だって、原作キャラや旅団との遭遇率が高過ぎる。

この世界で生き残る為にも最低限?は必須。?を手に入れて世界から隔離された環境で又ク又クと過ごす!! そして、何より重要なのが?だ。だが、これを達成する条件は、果てしなく厳しい。だって、ゴンさんやキルアを相手にしないといけない可能性があるからだ。正直、あの状態になったゴンさんには逆立ちをしても勝てないだろう。だが、われに秘策あり!! その方法は、まだ秘密だ。?と?を達成する為にも、やはり?の目標は不可欠。そして、?を獲得する手段として?だ。

「そろそろ、道場の時間でしょう?遅れずに行くのよ〜レイア」

「はい、もうすぐ行きます。お母様」

この世界では、前世の世界と違い人間の限界を超えている連中が多い。その事から鍛えれば誰でもある程度のところまでたどり着けるのは明白だ。両親がサラリーマンと専業主婦の私がどこまで強くなるかは疑問ではあるが…とりあえず、頑張ります!!

ちなみに、私の場合は俗に言うアルビノ呼ばれる遺伝子疾患を患っており、少しでも体が丈夫になりたいという名目で道場に通わせてもらっている。後、容姿については…ぶっちゃけ、某人型汎用兵器のアニメに出てきたカヲル君だ。

そして、私は今日も元気に心源流拳法道場へ通う。

心源流拳法道場にて。

「イチ！ ニ！ サン！ ヨン！………」

道場では、同年代に近い子供も多数いる。やはり、ハンター協会会長と同じ流派という事で人気なのだろうか、それとも自分の身程度を守るだけの力を付けておいてあげたいとおもう親心からなのだろうか。この世界の犯罪率は、前世の日本とは比べ物にならないからぬ。

それにしても…子供相手に多少は優しく指導してくれているというのにやはりキツイ。

腕立て、腹筋、スクワット、マラソン、柔軟体操が準備体操で終わり次第。正拳突き や 子供同士の組手。先輩からの型の指導など一日でたくさんのおこなう。今年から通い始めたが、みんなの練習についていくのがやっとだ。

全く、原作キャラたちの性能に啞然とするな。ひと桁の年齢で天空闘技場を200階まで上り詰めるってどういう事よ。

「はあ……」

「レイア！！ たるんどるぞ！！ マラソン2km追加だ」

「サーイエッサー！！」

ため息をつく私に、道場の高弟から活が入った。

くっそ！！ 誰でもいいから私に早く念能力を教えてくださいー！。

レイア私室にて。

「今日も疲れた〜」

いくら体力が必要だからって、四歳児には無理なレベルのメニューな気がする。だが、ここ最近着実に体力が底上げされているのも事実である。これが、話に聞く超回復と言う奴なのだろう。それとも、○櫛ワールド新法則なのだろうか。

このままの状況が続ければ、体力だけは確実に付くだろ。しかし、念能力については微妙だ。高弟になり師範代クラスの目に止まれば、開花させてもらえるかもしれないが…期待はできないだろう。やはり、念能力取得のためにハンターを目指すしかないかな。

？の目標達成の為に、どんなに遅くても原作キャラたちを同じ時期に念能力を学ばなければ、達成は不可能だろう。

私が合格可能なハンター試験は……やはり、原作キャラたちと同じ試験しかないだろうな。内容は、ある程度把握出来ている為、対策がしやすい。

ただし、ヒソカとイルミともご対面してしまうというマイナス要素もある。しかし、ネフェルピトーを嫁に迎えるという欲望と天秤に

かければあら不思議：天秤がネフェルピトー確保の方に傾く。

機会をみて、両親にハンター試験受験に付いて話そう。未成年の場合は、色々と許可が必要だった気がする。その後、道場のハンター試験経験者に指導を頼もう。それが例え茨の道であろうとも男にはやらねばならない時もある。

まずは、例の試験がいつなのかを調べてから今後の計画を立てよう。せめて、私がゴンやキルアと同年代でないことを切に願う。才能の差を少しでも埋める時間が欲しい。

数日後。

原作キャラが参加するハンター試験（287期）がいつなのか判明した。その結果を見て私は、安堵した。なぜなら、今から12年後だからである。これだけの猶予期間があれば、道場で血の滲む様な努力をすれば最低限合格可能ラインにはなれるだろう。

学業から両立は、大変だろうが頑張るしかない。仮にハンターになれたとしても、世の中で生きていく以上、最低限の学力は必要だからね。

「さーて、いくら12年後とはいえどうやって両親に切り出そうかな…」

問題は山済みである。12年の間にどれだけの問題を解決できるだろうか…いや、全て解決せねばならないだろう。考えるだけで気が重いな。

こういう時は、趣味に没頭するのが一番だ。

私は机の引き出しから、彫刻刀と2Lペットボトル位の木片を机の引き出しから取り出した。前世では、手先が器用だった事もあり趣味でフィギュア原型師をやっていた。おまけに、存外人気が出て某イベントではそれなりに稼いでいた事もあった。

まあ、この世界でフィギュアのような至高な趣味を持つ人物など、そうそう居ないだろうから収入には期待できないがね。

そして、私は今日も疲れを癒す為に趣味に没頭する。

この趣味が意外な人物の目に止まるとは、思ってもみなかったレイアである。

第1話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

更新ペースは、亀だと思いますが
長い目で見ていただけると幸いです。

第2話

ハンター試験受験を心に決めてから、早二年…6歳のレイアです。

俗に言う小学校一年生です。

ハンターハンターの世界にも学校ってあるのですね。てっきり、自己学習や通信教育しか存在しないと思っていました。だって、原作じゃそんな描写なかったしからね。

という事で、二回目の小学生を堪能しております。いやー、前世で社会人を経験している私にとって2時や3時に自宅に帰るのは又ルゲーもいいところだ。

だけど、道場に通う時間が学校の為、短くなってしまったのは少し痛いかなと思ったけど…そんな事は無駄な心配だった。先輩達が濃厚なトレーニングメニューをしつかりと考えてくれている為、時間が短くなるうと総運動量は変わらないという虐め。

今日も道場で鍛錬を終えて、疲れた体に鞭を打って帰宅した。

このままでは、ハンター試験前に私が死ぬんじゃないだろうかと思っくくらいに疲れた。原作キャラの才能が妬ましい。キルアなんて6歳で天空闘技場を僅か二ヶ月で150階まで登ったんでしよう。きっと私が一ヶ月かかった事を一時間とかからずにもノにしてしまうだろう。

やめた やめた!!

こういう辛気臭い事を考えるのは、ダメだ。そもそも比べる対象が誤っているのだ。この世界の中心的存在と脇役の自分を比べるなどナンセンスだ。こういう時は、電腦ネットと趣味のフィギュア原型でも作ろう。

「お、またMilkyから返事がきたか。相変わらずマメな人だな」
この二年で私のフィギュアが電腦ネットのオタクの中でも稀に話題に挙げられるようになるまで、腕を上げた。おかげで、こういったファンの方からメッセージが貰えるようにもなった。それにしても、木彫りフィギュア何てマニアックな代物を毎回買ってくれるこの人に感謝しないといけないね。

私のフィギュアは、下着のシワまで丁寧につけている為、一ヶ月で1・2体程度しか作れない。出来上がり次第、即売付きのネットオークションに流している。その殆どを落札してくれているのがMilkyというハンドルネームの人だ。全く、原価が0円に近い商品が一体辺り10万ジェニーで売れるのだからメシウマだよ。

「なるほどなるほど…色を塗ったフィギュアを売り出して欲しいか」
Milkyからのメールには、たわいない挨拶とフィギュアを塗装して売り出して欲しいとのことだ。本来フィギュアとは、塗装されてあるべきものと印刷すれば原稿用紙5枚にはなる程の文章を書いてきた。塗装をする事に対して誰かの師事を仰ぎたいのであれば手配までしてくれると至れり尽くせりだ。

何者かは知らないが、熱い漢であることは間違いないな。きっと、フィギュアに命をかけているようなそんな人物だろう。折角の機会だからダメ元でお願いしてみようかな。ちょうど、漆塗りに興味が

あつたから その辺の手配できたらお願いと書いておこう。

「木彫りフィギュアの漆塗りとか買う方もアレだが…それを趣味で作ろうとする私も相当のアホだな」

メール返信完了。

さてさて、あんまり遅いと両親が心配するから今日も寝るとしよう。

一週間後。

学校から帰ってきてみると、家の前に黒塗りの高級車が止まっています。まるで、ドラマを見ているかのようです。

あれ、これってかなりまずい状況じゃない!?

父が会社のお金に手を付けてその代償に私と母が売られるとか、誰かの連帯保証人で借りた人が逃げたから回収にきたとか展開か!?

だが、どちらにせよ普通の状況ではない。

ここは、素直に警察に助けを求めに逃げるのが得策だろう。私のような子供が大人の武力に叶うわけもないからね。

私が身を翻し、この場を去ろうとした瞬間 車に乗っている黒いスーツを着込んだドライバーと目があつた。

ゾクゾク

こいつは、ヤバイ！！

道場に通っている事から自分より強い人は見慣れているので、多少相手が強かろうと驚く事はない。しかし、あのドライバー明らかに只者ではない。道場の高弟よりかは、確実に強い。下手したら師範代にも届くかもしれない。そう感じた。

逃げる！！

それが私にできる唯一の手段だった。逃げ切れるかどうかなんて問題ではない…逃げる以外に道がないのだ。私は、力の限り人気の多い場所に向かって走った。6歳の足では、あの者から逃げる事など出来ないのは至極当たり前だが…ここは住宅地だ。そして、家から約50mも警察がいる派出所モドキがある。そこまでたどり着けば私の勝ちだ。

ダッダダダダ

地面を力強く蹴り、一心不乱に走る。

バタン

背後で車の扉を締めると聞こえた瞬間、目の前に黒い壁が現れた。人間急には止まれない…当然 私はそのまま黒い壁に衝突した。

ドーン

どうやら、壁ではなく人と衝突してしまったようだ。本来であればこちらが謝らねばならないのだが…私にはそんな余裕はなく。ぶつかった人の助けを求めた。

逆光でよく顔は見えないが…近所の大人だろう。

「お願いです 助けてください!!」

「どうしたのですか?」

なにやら、とても強そうなお声の人だ。

「家に何やら物騒な面構えの人が来て、まだ家には母が…」

「それは、大変ですね。それで、何処にその人達が?」

どこつて、私の真後ろから走ってきているでしょう。マフィアみたいな顔つきをしたスーツの男が…

「どこつて…あれ?」

振り返ってみれば誰も居ない。あるのは、黒い車だけだ。

・
・
・

「どうなさいました レイア様」

全身から冷汗が流れる。まさに、蛇に睨まれた蛙と言った感じだ。

「ど、どちら様でしょうか?」

「申し遅れました。私は、とある方からレイア様のお手伝いをする
為に遣わされましたワジマと申します。以後よろしくお願いします」
私は、この瞬間 M i i k y というハンドルネームの人が誰なのか
を理解した。まさか、M i i k y がゾルディック家のミルクだった
とは…普通気づくよねと後々思ったレイアであった。

第2話（後書き）

最後までよんでくれてありがとうございます。

ハンター試験開始までは、あと数話こういった展開が続きます@@@

第3話

ゾルディック家執事襲来事件より、二年が経過して今8歳のレイアです。

実は何を隠そう…あの黒スーツを着た執事こそが私の漆塗りの師匠なのである。一体、ゾルディック家の執事は何者だと言いたくなる正直、ここまで多芸に秀でているのならば、執事にフィギュアづくりを命じればいいと思う。

しかも、この人さ…私の実家のお隣に住んでいるのだよ。なんでも私が一人前の漆塗り職人になるまで帰らないそうだ。

両親には、親切なお隣さんから漆塗りを学んでいますと可愛く言っているが…マジ命懸け過ぎる。

「集中しなさい。線が歪んでいます」

「はい!!! 師匠」

という事で今日も元気に漆塗りを学習中です。

早朝に漆塗りを学び、昼間が学校、夕方に道場、夜にフィギュアづくり。既に過労死しそうな殺人的なスケジュールだ。かと言って、漆塗りにフィギュアも勝手にやめられない状況だ。死にたくないもん。

だが、考えようによってはタダで最強のボディーガードを付けてもらっているとも取れるのでありがたさ半分といったところだ。

「そろそろ、学校の時間ですね。行ってらっしゃいませ レイア様」
「今日もご指導ありがとうございます ワジマさん。行ってきます」

基本的にいい人なのだろうが…顔が怖い。いや…ゾルディック家の執事であるからいい人というのは間違いだな。命令一つで二年間指導した私でも躊躇いなく殺すだろう。

怖い 怖い。

学校にて。

「好きです。付き合ってください」

クラス一の美少女が私に告白してきた。正直言えば、私ロリコンでもあるから嬉しいよ。でもね、私は浮気しない事になっているんだ。

「ごめんなさい。私には既に心に決めた人？が居るので」

最近、学校で呼び出される事が多くなった。素直に無視するのでもいいのだが…こういう多感な年頃の女性を無下に扱った後が怖い。だから、誠意をもって謝る事になっている。それでも、翌日には陰口を叩かれることが多いけどね。

モテる容姿に生まれたのは非常に嬉しい。女性に好かれるのも歓迎だ。しかし…断られなければならないのだ。それが、将来の自分の糧にな

るのだから今は耐え忍ぶ。

「や、やっぱりホモだって噂は本当だったのねー」

女の子が何やら大声でとんでもない事を言いながら走り出した。そんな根も葉もない事をどの口がいうんだ！

「まてや…って、無駄にはえええええー」

口封じをしようと思ったときには既に女の子は居なかった。口封じと言っても、当然物理的な意味じゃない。ただ、私がホモじゃないとわかるまでじっくりと話し合いをするだけだ。

翌日、学校では私がホモと認識されていた。

くっそ！！ 登校拒否してもいいレベルだぞ これ。

数週間後の道場にて。

何やら、むさ苦しい高弟から身の毛がよだつような熱い視線を感じる。その高弟は、やたらと私の世話を焼いてくれる…特に組手の相手を積極的にしてくれる。まあ、私としては非常にありがたい。

ここ二年、私はワジマさんが実家でもやっていたと言う筋トレを導入した。筋トレというか…ぶっちゃけ、ゾルディック家の門番がやっていた重石を付けるトレーニングだ。あれが存外、いいトレーニングになるのですよ。まあ、重さはゴン達が付けていたお守りの1/3程度だけだね。子供のうちから無理をすると身長が伸びなくなるから控えめにしておいた。

そんなわけで同世代の子では、既に私の相手には役不足となつてしまっている。

だから、年次の上の先輩や高弟に混ざる事もしばしばといった感じだ。

「本日の鍛錬はここまで！！ 皆のものを気を付けて帰るのだぞ。ここ最近、暴漢の被害が多くなってきている。いいかお前ら…返り討ちにしろ！！」

「……………押忍！！……………」

まあ、私には関係ないけどね。

こういう時に男に生まれてよかったわとつくづく思う。……………心配がなくなるからね。母の事は少なからず心配ではあるが……………うちのお隣さんを考えれば、何も問題がない。

さーて、今日も死ぬほど疲れたからさっさと家に帰って、掘り掘りしよう…木彫りのな意味で。

「お先に失礼します！！」

「ああ、気を付けて帰るんだよ」

道場の皆に挨拶をして、帰路についた。

帰り道にて。

「朱に染まればなんとやら…か」

なんだかんだでこの世界を満喫している自分が怖いな。前世と比べて肉体面がかなり強くなっている事もあるのだろう。まあ、それでも道場の高弟には勝てないけどね。正直、道場の連中を見ているとみんなハンター試験合格できるんじゃないかと思う位だ。特に体力面が異常に優れている気がする。

特に組手の指導をしてくれる高弟なんて、体力・スピード・攻撃力とどれをとっても他の高弟と比べて抜きに出ているからね。恐らくハンター試験受験時のハンゾー位強いんじゃないかな。

ザワザワ

一瞬、肉食獣に狙われているような気がした。

「あれ…誰もいないか。おかしいな、今…気のせいかな」

背後を振り返ってみても誰もいない。周りを見回しても誰もいなかった。きつと、最近頑張りすぎて疲れているのだろう…帰ったら掘り掘りしよう。

翌日、高弟の一人が行方不明になったと聞いた。

ミルク様からの命令でレイア様の護衛について早二年が経った。

子供の成長とは恐ろしいものだ：私がゾルディックで長年かけて学んだ事をスポンジのように吸収していくのだから。後、4・5年もすれば一人前と言ってもいいだろう。ミルキ様が手厚く保護するのも頷ける。

特にフィギュアといった模型づくりの才能は実に目を見張るものがある。一つ一つの作品に対して愛情すら感じられる程だ。遠くない未来、名前が売れる事は間違いないだろう：主に変態という意味で時計を見るともうすぐ8時になる。

そろそろ、道場が終わり帰宅される時間だ。

最近、この辺で若い男ばかりを狙った暴漢が出ると噂されている。しかも、それなりに腕が立つらしく今だに逮捕に至っていない。レイア様は8歳ではあるが、その身体能力は既に大人にも引けを取らない為、普通の暴漢であれば返り討ちにする事位可能だろう。まさに、心源流拳法に四年も毎日通い続けている成果とも言えるだろう。

「念には念を入れるとしよう」

身だしなみを整えて家を出た。

レイアの帰宅路にて。

レイア様から20m程後方に獲物を狙うような目付きの男がいた。

なるほど…捕まらないはずだ。

あの男は確か、レイア様の身辺調査を行なった際にリストに載っていた。レイア様を通う心源流拳道場の高弟だったはず。ハンター試験合格間違いなしと言われる逸材であるが、素行が悪いとも言われている。

念能力までは取得していないようだが、身のこなしを見る限り今のレイア様では勝てないだろう。

暴漢がレイア様に背後から襲いかかった。それと同時に私は、暴漢の前に立ちふさがった。

「悪いが、貴様には死んでもらう」

ゴキリ

私は男の背後に回り込み首の骨をへし折った。そして、男の死体を背負ってその場から離れた。

その時間、僅か一秒たらず…誰にも気づかれる事はなかった。

第3話（後書き）

少しペースが早い気もしますが…ハンター試験まで
どンドン行っちゃいます。

やっぱり、レイアは尻に縁がある。

第4話（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第4話

暴漢事件から更に4年が経過して、12歳になったレイアです。

心源流拳法に通いつめて8年。フィギュア原型師歴も同じく8年。もう、立派な変態の仲間入りを果たしました。ワジマさんからは、今年いっぱい指導する事が無くなると言われて寂しいです。

ワジマさんの事はおいといて、私は父の仕事の関係で家族揃ってヨークシンに来ております。無論、オークションは今現在開催中です。まさか、幻影旅団と関係ないイベントでここにこられたのは僥倖だ。

本日は、いつもの木彫りのフィギュアとは違って変わって時代の最先端を誇る「ねんどろいど」を30体程作って持ってきた。日頃のフィギュアづくりの合間にセコセコと作った物だが、出来栄は自信がある。ジャパンで流行っているアニメや漫画のヒロインをモチーフにしたり、前世で見たことがあるモノを再現したりと様々な物を作ってきた。

と言っわけで、今日も商い頑張ります。

「じゃあ、お父様お母様。15時にホテル前で！！行つてきます」

仕事を終えた両親を二人つきりにしてあげるといふ気遣いのできる息子って素晴らしいよね。本当は、子供一人物騒な場所に行かせるのも良くないと言われたのだが…これでもお父様より強いんだけど
と言ったら、お父様が崩れ落ちた…ごめんねお父様。

ヨークシンの値札競売市にて。

ここは、誰でも好きに取引が出来る会場だ。もともと、値段は付けないで規定時刻まで最高値を付けた人に売るとというのがルールがあるけどね。

だけど、私の「ねんどろいど」の価値がどの程度か知る良い機会だなとも思う。一般人相手では、1個辺り300ジェニー位で売ればいいかな。いつもフィギュアをオークションにかけているサイトに出せば、良い値で買ってくれる固定客がいるので確実に儲かるが…それではつまらないからね。

という訳で、私はレジヤシートを広げて客を待つ。

一時間経過。

物珍しさに、何人かの目を引くが値段つかず。時間はまだまだあるから、本でも読みながら待つとしよう。

二時間経過。

言うまでもなく、誰も値段を付けてくれません。分かっていたさ、分かっていたさ。私の趣味が極めてごく一部の人間にしか通じないという事くらいね。でもさ…少しくらい夢を見てもいいじゃん。

あまりに暇だったので、近所の露店を見ようかなとも思ったが…荷物を置いたまま離れるなどこの世界では持つて行って下さいと言っているも同義。

私も念能力が使えたら、”凝”で一攫千金大作戦とか出来たのだから…と思いつつ、再び本を読む。

三時間経過。

「子供が一人で露店を開くなんて珍しいね。物騒な人が多いから危ないよ」

「そうなのですか。いやー、自分が作った作品が売れるか試したいなど好奇心でそこまで考えていませんでした」

私があまりに退屈そうで且つ客が来ないから、見に見かねて隣で露店を出しているオジサンが話しかけてきてくれた。もともと、オジサンの露店も客足はアレだけだね。

「変わった人形だが、なかなかいい腕じゃないか。折角だから、その人形一つとうちの値札のついてない商品を一つ交換しないかい？ 値札競売市に来て手ぶらじゃ帰りにくいだろう。まあ、うちの商品は実家の倉庫から引っ張り出してきたガラクタばかりだがね」

オジサンが苦笑する。

「喜んで！！ どれもこれも私が性を込めて作った作品達です。お好きな子を持って行ってください」

「ありがとう。では…この子を貰っよ」

どうやら、このオジサンはロリコンらしいな。迷わず、某白い悪魔

の人形の白スク水verを取っていったよ。欲しいなら値段つけて買ってくれよ。今ならどれも値段ついてないのに…。

では、私も選ばせてもらいましょう。

「どれにしようかな…」

オジサンの露店の商品は、数こそあるが…その半分以上は値段が付けられていない。そして、一本の変わった形状のナイフに目が行った。最近流行りのデザインではなく、どこか古びたナイフだ。

・
・
・

このナイフ…私の記憶が確かならば、ヨークシン編でゴンが見つかるハズのベンズナイフ!!

「オジサン、このナイフを買っていいかな？」

「値札がついてないから構わんが…子供がナイフを持つのは、関心しないな」

「ごもつともな意見だ。」

「大丈夫ですよ。私こう見えて、趣味で木彫りを8年近くやってるので刃物の扱いは慣れていきます」

「そうか、なら気をつけるんだぞ」

ベنزナイフGetだぜ！！

きつと、良い切れ味なのだろうな…これを使ってフィギュア作りた
いな。後、ハンター試験にも持参していこう。きつと、役に立つだ
ろう。

四時間後。

結局、あの後も買い手がつかず時間切れだ。まあ、売れはしなかつ
たが物々交換でとてもいい品物が手に入ったのは幸運だ。

「じゃあ、オジサンまたねー」

「おう、気をつけるんだぞ 坊主」

タダ同然でベنزナイフをゲットしてすごく気分がいいです。オジ
サンには悪いけど、これが商売なのよね。

「あ…ナイフもったまま飛行機って乗れるのかな」

空港の金属チェックで当然引っかかり、両親に怒られたの言うま
でもない。

「これも落札完了」

ワジマを送り付けてからというものの、数年でメキメキと腕を上げて

きたな。おまけに、アニメや漫画のキャラだけでなくオリジナルキャラのフィギュアまで出し始めている。しかも、完成度が高い…まるで、完成された作品から取ってきたような感じがする程だ。

今回の新商品「ねんどろいど」も実に素晴らしい。

二頭身でありながら、そのキャラの個性を全く殺していない。むしろ、引き立たせているようにも感じる。

今回のオークションでは、全29体が即売付きで出されいた為、無論全て俺が落札した。

29体：なんだ、この中途半端な数は。

『ワジマ、レイアが作っている「ねんどろいど」という商品を知っているな?』

『存じ上げております。全部で30体作成し、ヨークシンの値札競売市で売り出したそうです。なんでも、一体も売れなかつたそうですが…それを見かねて横の露店の方が持っていたナイフと交換したそうです。私もそのナイフを見せていただいたのですが…恐らくは、ベンズナイフかと』

ベンズナイフ…たしか、オヤジが趣味で集めている骨董品だったな。だが、そんなのどうでもいいんだよ。

俺にとって、大事なものはフィギュア!!

それにしても、値札競売市か…相手を見つけ出すのは不可能に近いな。まあ、仕方ない。

依頼すれば、再度作らせる事は可能であるが、それではファンとして邪道。俺の矜持に反する！！ 作り手の支援はするが 過度な干渉はしない。

俺のクオリティだ。

第4話（後書き）

誤字脱字報告、感想等頂けたらとても嬉しいです。

できれば、原作キャラの正確や口調等で突っこみたい事は、あると思いますが…見てみぬふりをしていただけると幸いです。

休日が終わった…そして、更新速度が激減致します@@

第5話

ヨークシンから更に2年が経過しました。そして、今日で満14歳になりました。言い換えれば、ハンター試験まで後2年ということころまで来ていた。

ちなみに、お世話になったワジマさんは昨年実家に帰っていった。ろくに挨拶もできずに別れてしまったのは非常に悲しい。役目が終わったら即座に帰るとか、執事としては有能かもしれないが…人としては幾分かアレですね。まあ、執事の教育方針がかなり特殊な家だから理解はしているけどね。

ワジマさんの事は、置いておいて…

今日は、私の誕生日という事で両親が手作りのケーキまで用意して祝っていたいております。

「お誕生日おめでとう レイア」

「おめでとう レイア」

「ありがとう お父様、お母様」

こうして、家族で食事を楽しめるのは最高だ。やはり、こういう暖かい家庭を持ちたいよね…ピトーと一緒に。そんなわけで、今日一日はいつもの非日常を忘れて ただの子供に戻ります。

数時間後。

両親と楽しい時間をすごし部屋でパソコンを見てみると、一通のメールが来ている。とっても、嫌な予感がする。普通なら、フィギュア関連のメールであろうが、本日は、私の誕生日だ…そんな日にくるメールなど不幸のメールに間違いない。

恐る恐るメールの送信元を見ると、案の定Milkyからだっ
た。

大事なファンを悪く言うわけではないが、誕生日には見たくないネームであった。誕生日に、暗殺一家からメールを貰うってさ…なんだか、怖いじゃん。いつも、お前を見ているぞ的な意味でさ。

「えーと、なににな…」

セオリーの如く、挨拶から入り…誕生日に祝辞…作品に対する評価…次回作の予定の質問などが書かれている。そして最後に…こう書かれていた。

『オヤジ達にレイアの作品を熱く語ったら、家族の像を作ってもらおうという話になった。良い返事が期待している』

・
・
・

ドクンドクン

冷汗は流れ、心拍数はかつてない程に高くなっている。

か、考えるのだ レイア!!

相手の気分を害さず且つこの場を乗り切る方法を…すぐに返事をする必要はないだろうが、どんなに遅くても一週間以内に返事をしなければ本当に命に関わる。

ポク ポク ポク チーーン

ダメだー！ー！！

一休さんスタイルで考えてはみたが何一つアイデアが出てこない。そもそも、ゾルディックの依頼を断るとか無理ゲーだろう。ハンター試験や学業があるから、お断りしますとか言った暁には、イルミに針でめった刺しにされそうだ。

諦めよう…人間諦めが肝心だと何処かで聞いた気がするしね。

私は、素直に快諾の返答を送った。

誕生日に死刑執行書にサインするような行為をする事になるなんて、私は世界一不幸な少年じゃないか。

恐らく、10人の大家族像となると…最低半年は帰れないのかな。家族にどう説明しよう。後、道場にも話をつけておかないとだめだよな。

二週間後。

絶対に行きたくないでござる…！ どこぞのニート待みたいなセリフを夜な夜な吐きつつ…とうとう、お迎えの日がやってきました。

快諾のメール送信後は、二週間後に迎えの者を寄こすからそれまでに周辺整理をしておけとの事だった。私が二年後のハンター試験受験の為に頑張っているのを知っていたのだろう。あちらから、道場に行けない為 代案として執事の方が指導をしてくれる事になりました。当然、像作成にあたり報酬までちゃんと用意してくれるとの事だ。

「相手先にご迷惑をおかけしないようにね」

「子供のうちは何事も経験だ、しっかりやってこい」

両親には、電腦ネットで知り合った家庭にホームステイと言って乗り切った。もちろん、裏を合わせる為に、色々とゾルディックの方にも協力いただいた。真実など告げられるはずもない…伝説の暗殺一家にお呼ばれたので一年位戻る事が出来ませんなんて、どの口が言えるというのだ。

私に出来る事は、親に心配を掛けずに笑顔で家を出ていく…ただそれだけさ。

「もちろんですお父様、お母様。では、行ってきますね。お父様もお母様も体には気を付けてください。毎週必ずメールしますね」

子供らしく、元気に腕を振りながら家を出た。そして、家の目の前に止められている黒塗りの高級車へと足を運んだ。

ボタン

運転席から懐かしい顔の人が出てきた。やはり、あなたがお迎えに来てくれましたか…さりげない心遣いなのだろう。

「お久しぶりです レイア様。私めが、ご案内を務めさせていただきます」

「お久しぶりです ワジマさん。今日からよろしくお願いしますね」

神様…今だけは、貴方を信じたいです。どうか、生きて帰れますように。

一週間後、ドキア共和国のククルーマウンテンにて。

実家からココまでは存外遠く 道中ホテルに泊まりながら一週間かけてここまで来ました。なんと、ホテルは全てロイヤルスイートを用意してくれて最高でした。

ブルジョア万歳！！

と、馬鹿な事を考えているうちにゾルディック家の門…通称「黄泉への扉」まで来てしまった。

「す、すごく大きいです」

ゴクリ

「どうなさいましたレイア様？」

「ちょっと、持病の癢が…とところで、あの壁のような扉 開くので

すか？」

少し無理がある返しだったが…まあいいだろう。

「ええ、開きますよ。ここからは、徒歩になりますので私は門番と話を付けてきます。しばしお待ちを」

そういつて、ワジマさんは車を降りて門番の所へ行つた。

確か、原作でも車が走れるような場所じゃなかったからね。もしかしたら、車が走れる隠し通路とかもあるかもしれないが、そんなルートは部外者である私の為に使うはずないしね。

それにしても、ヨークシンといいゾルディック家といい思わぬところで原作主人公一行が行く場所に行つたな。

なんの因果やら…。

「試してみようかな」

原作のゴン達一行が着た当初は開ける事が出来なかったこの扉をね。心源流拳法を10年、そして重石トレーニングを8年と原作組みと比べてかなり長い年月を鍛えている。

荷物を持って車を降り、扉の前まで着た。

キルアのように3の扉までは無理にしても、1の扉…出来る事ならば2の扉まで開けられるといいな。全身の筋肉をほぐすために、軽くストレッチをして扉に手を当てた。

ワジマさんもちちに気がついたが、特に注意する事なく見守っている。

私がこの扉を開ける事ができないと思っっているのだろうか。それとも、扉を開けてゾルディック家に正式な手順で入れると思っっているのだろうか。

見せてあげましょう…10年間の成果を!!

「うおおおおおおお!!」

扉は、想像以上に重い!!

だが、この程度の門を開けられずしてどうする。将来相手取る事になるゴン、キルア…そして、何よりピトーを手に入れるのにこの程度の壁を開けられなくてどうする!!

力を振り絞れ!! 前へ進め!! この10年間が無駄でなかった事を証明しろ!!

「意地があんだよ!男の子にはっ!!」

ギイゴオオオーーン

1の扉が鈍い音を響かせて、徐々に開いていった。

まさに、感動の瞬間である。原作のゴン達では、来た当初開ける事が出来なかった門をこの私が開ける事に成功したのだ。10年間、幼少期の楽しい期間の全てを犠牲にしたかいた言っものだ。

しかし、原作キャラ達は一ヶ月掛からずこの門を開けてしまったという事を後々思い出し、枕を濡らす事になるのであった。

第5話（後書き）

レイアが生きて帰れますように…

第6話

ゾルディック家に軟禁されて、早一年が経ちました。そして、先日15歳になりました。今でも、このコワモテな人達に囲まれて誕生日ケーキの蝋燭を吹き消したのは記憶に新しい。一体、なんの罰ゲームだよと言いたい位だ。

レイア用作業部屋にて。

私は、執事達が暮らしている屋敷で作業をしており、今では執事の皆さんとお茶をする程の仲になりました。赤の他人を本邸に住まわすのは危険だ等の問題だとか、色々と裏事情はありそうだけどね。

『拝啓

お父様、お母様元気にしておりますか？ 私は、ホームステイ先の方と一緒に仲良くやっております。勿論、道場に通っていないからといって怠けてはいませんよ。むしろ、以前より激しいトレーニングを日夜しております。後、今年中には帰れそうなので、久しぶりにお母様の手料理が食べたいです。切実に…

P S

お土産いっぱい買って帰りますから、楽しみにしてください。

敬具』

メール送信完了。

今週の生存報告が完了した。年が明けて作業完了の見通しが経ったが…本当に完成したら家に返してもらえるのかな。死体で家に帰るなんて嫌だよ。

既に像自体は完成し、残るは塗装のみといった現状だ。我ながら良い出来だと思う。シワや血管、髪の毛は勿論再現できるものは全て再現した。まさに、命懸けの作業だった。人間、命懸けとなると限界を超えられると言うのを実感した。

まるで、ここにいるかの様な威圧感だ。

コンコン

「失礼いたします レイア様。そろそろ一息つかれませんか？」

「いつもありがとう ワジマさん」

見計らったかのようなタイミングで私を休憩に誘ってきてくれた。まるで、何処かでメール送信が終わるのを確認しているかのようだ。

「いつ見ても素晴らしいですな…ここ数年で更に腕を挙げられたのがよくわかります。これならば、旦那様達もご満足いただけるでしょう」

「ははは、そう言っていただけと作った方としても嬉しいよ。もつとも、出来栄がいいのは当たり前だよ…命懸けだから」

「心中お察しいたします」

私の一言にワジマさんの表情が少し暗くなった。一応、責任は感じ

てくれているのね。

今でも鮮明に思い出せる…一年前のあの時の事を。

「私がご案内できるのは、ここまでです。この扉の向こうに皆様がお揃いです。絶対に失礼の無いようお願い致します。もし、ご機嫌を損ねるような事になれば命の保証はしかねます。ご武運をお祈り致します」

へ！？

本邸まで案内されて、いきなり死ぬかもしれないとか酷すぎる。事前に話をつけて最低限命の保証位してくれよ。

ドーーーーン

まるで、この先に大魔王が居座っていてもおかしくないような立派な扉の前で放置された。男は度胸だ。なるようになれ！！

扉に手を開けるべく手を掛けた。

あ…開かない！！

更に力を入れてみるが開かない。なるほど、試しの門並にきつい扉という事か。

「うおおおおおおー！ー！ー！」

早く、挨拶せねば一秒ごとに相手の機嫌が悪くなるかもしれない。だが…一向に扉はびくともしない。一体、どれだけ重い扉なのだ。

もしかして、引き戸か…！

古来より、押してもダメなら引いてみと諺があるしな。

では、さっそく…

「どおおおおおおりゃー！ー！ー！ー！あああああ！ー！」

全力で引いてはみるが…びくともしない。こんな扉を毎日開閉するとは、ゾルディックは化け物か…！ いや、化け物だったわ。

「あゝ、レイア様…その扉はスライド式です」

・
・
・

そついう事は早く言ってよね！！ 絶対に中で待っている人達に私のうめき声が聞こえたじゃないか。気を取り直して、扉を開けた。

その場所は、漫画でキルアとシルバが二人で親子の誓い？だったけな… そんなのをやっていた部屋であった。そして、部屋の中にはゾルディック家の人達が総集していた。当然、キルアも居たがまるで興味がないようでこちらの顔すら見ない。ミルキとイルミを除いて、大体そのような反応だ。

イルミから感じるのは、恐怖…圧倒的恐怖！！

「……………ッ」

まるで極寒後に裸で居るかのような感覚に襲われた。一步も動く事ができない…挨拶しようにも声すら発生出来ない。なぜなら、私が何かしたら死ぬ…そんな気がしたからだ。

「これイルミ、そんな殺気を立てるな。相手が今にも死にそうな顔になっているぞ」

「わかった。ただし、少しでも変な動きをしたら殺すよ」

無機質な瞳をしたイルミが私に警告をした。

一体、ゾルディック家の総力を前にして何か揉め事を起こせるような人物などこの世にいないだろう。

「孫が悪い事をしたな。楽にするといい」

ゾルディックの中で一番 話を通じそうなゼノが助けてくれた。

「はあはあ…助かりました ありがとうございます。改まして…レミアと申します。この度は、みなさまの像をお作りするという事でミルキ様よりご依頼を受けました。よろしく お願い致します」

無難に挨拶をした。何をするにも命懸けのこの場では、下手に長い話をするのも死に直結しかねない。早いところ、挨拶を終えてこの場を立ち去りたい…。

「で、俺達は何をすればいいのだ？」

シルバの渋い声が響いた。

対面するだけで、本能が逃げると警告してくる。これが、世界最強の一角：本当に同じ人間なのかと疑問に思ってしまう。一体、どうやって鍛えればそこまでたどり着けるのだ。

胃に穴が空いてしまいそうだ。

「は、はい。皆様の寸法を図るために……」

トストトス

私の足元にイルミの針が飛んできた。

「……立ち上がって一回りしていただければ結構です。後は、私の方でデザイン致します。もし、ご希望のポーズ等があれば言っていたければその通りに作り上げます」

本当は、メジャーとか使ってじっくりと図りたいのだが、イルミから警告された。

大体、ゾルディック家の御婦人相手にそんな暴挙など出来るはずもない。その為、服の上から目視で計測する。私の程の変態になれば、例え服の上からであろうともスリーサイズなどを判断できる。

なんでも、変態という名の紳士になればこの程度常識らしいと電脳ネットを見た。私がよく見るサイトでも、この特技を身に付けてい

る人物は数多いと聞く。

そして、永遠にも感じられる寸法の測定が終わった。今までの人生で一番集中した時間であったのは間違いないだろう。目に、脳に、記憶に全てを記憶させた。集中しすぎて、少々目眩がしてきたよ。

測定後に、キルアの母親とカルトからポーズというか…キルアと手を繋いだ像にしてくれといったささやかなご要望だ。無論、私は快諾しようとしたがキルアが恥ずかしいから止めると言っていたが…最終的に、カルトの泣き落しでキルアが折れた。

ここで私はとある疑問に気がついた。

確か、漫画のバスガイドは10人家族と言っていたが…何度数えても9人しかいない。何かしらの事情で席を外しているのだろうか…聞いてみたほうがいいかな。それとも、家庭の事情と言う奴なのか…ワジマさんも「皆様がお揃いです」と言っていたからね。

他人の家庭事情に踏み込むのは止めておこう…なんだか死亡フラグな気がする。

「そうそう、最後に言い忘れるところだった…もし、くだらない像だったら殺すよ」

ゾクリ

「わ、分かっております。私もプロとしても誇りがあります。作るからには、皆様が満足するものを作ります。ですから、私からも一つお願いが…」

「言ってみていいよ」

「満足いく像を作ったら…生きて帰らせてください。私は、まだやるべき事があるのです」

こんなところで、まだ死ぬわけにはいかない。死ぬなら、嫁の胸の中でと固く誓っているのだから…こんな、むさ苦しいところで死ぬなんてゴメンだ。

という、本心を隠しつつ真剣な眼差しでイルミを見た。

「…好きにすれば、ただし外で家族の事しゃべったら殺すから」

そう言つて、イルミが部屋を出ていった。それにつられて、他の者もご退場していった。

花畑が見えた…マジで…!!

だが、生きて帰れる光が見えた。これが、”取引”に該当するかわからないが…家族全員の前で嘘を付くような事をする一家ではないからね。

さて、死ぬ気でやりますか…生き残る為に。

「無茶しやがつて…。いいか、絶対死ぬなよ。お前には、まだまだフィギュアを作ってもらわないといけないんだからな。必要な物や欲しい物があつたらなんでも言え、すぐに用意してやる」

パリパリ

ポテチを食べながら励ましてくれるミルキの優しさに泣きそうになった。

「私も死にたくありませんから…死力を尽くしますよ。ミルキ様」

第6話（後書き）

レイアが無事に生きて帰れば、まもなくハンター試験。
ようやくプロローグが終わります！！

PS

ストックが底をつきましたので、
休日まで更新がないかもしれません。

第7話（前書き）

予約投稿の日付を誤ってしまった…。

第7話

塗装作業を初めて十ヶ月目：今だに、実家に帰れず日々労働に勤しむレイアです。

塗装作業も順調に進み、もう一ヶ月もあれば完成しそうです。最後まで気を抜かずに突き進むぞ！！イルミが気に入るか次第で私の運命が決まるのだから…死にたくないでござる。

そろそろ、ワジマさんと特訓の時間だな。

庭にて。

この10ヶ月、筋トレや組手以外にも拳銃の扱いを教わっております。

パンパンパンパーーン

「命中率は、三割といったところですね。やはり、射撃の才能はあまりないようですね。今からでもナイフに切り替える方がよろしいかと思いますが…」

「うー、でも止まっているのなら命中率ほぼ100%ですよ！！」
ナイフの使い方も勿論上達したいが…私が一番求めているのには、銃の扱いだ。理由は、近距離から中距離まで汎用的に使える。そしてなによりナイフより一撃の殺傷能力が高いからだ。

「戦闘中に銃口が向けられると分かっている止まる者は、まず居ないでしょう。後、正直に申し上げますと…その程度の銃弾、数発食らったところで我々位になれば行動に支障はありません」

確かに、こんな玩具の様な銃では念能力者相手には役不足だ。旅団の怪力馬鹿なんてRPGみたいなのを素手で受け止めていたからな。だが、念能力者といえども無傷というわけではないのも事実。変化系能力者とかだったら、RPGを食らって即死だったに違いない。要するに大事なものは、火力なのだよ。

「だったら、50口径のデザートイーグルでダムダム弾使用だったらどうか？」

大口径の銃に国際条例で禁止されている弾なら、威力はかなりのものだろう。理想は、1cmの鉄板を貫通出来る位の銃が欲しい。

「なるほど…そこまで、殺傷力を高められると抜くと死にますね。気を抜かなくても、かなりの痛手ですね。ちなみに、レイア様はどのような目的でお使いになるのですか？」

ワジマさんの目が一瞬鋭くなった。

ゾルディック家の者に手をだすつもりなのか疑っているのだろう。誰が、そんな命知らずな事をするか！！0.1mgでクジラが動かなくなる毒で平気な連中だぞ…強化系でなくてもダムダム弾程度じゃ殺せる気がしない。そもそも、拳銃を向ける前に私があの世にいるわ。

「ハンター試験…どうしても、受からないといけないんだ。その機会を逃せば私には後がないから…オマケで言えば、自衛の為にね」

「何やら深い事情がありそうですね。わかりました…後日、その銃と弾をご用意いたしましょう。大口径の銃は、今までの銃と違って勝手が違います。ここにいるうちに練習しておいたほうがいいですよ」

嘘！！ 本当に用意してくれるんだ！！

あの大口徑の銃があれば、一部を除くハンター試験の受験者やキメラアントの雑魚共には非常に有効だろう。本来なら、ライセンス獲得後に正規ルートで手に入れるつもりだったが思わぬところで手に入りそうだ。生きて帰る際は、こっそりとカバンに詰めて帰ろう。

「ありがとう ワジマさん！！」

「このくらいお安い御用です」

その後は、筋トレ・組手を行い一日の訓練を終えた。

ここにきて一年と十ヶ月目にしてようやく二の扉を開けきる事が出来るまでに成長しました。私個人としては、あの重量を誇る扉を二年で二の扉まで開けられるようになったのは快拳とも言える。きつと、三の扉を開けるには念を覚えないと不可能に近いだろうな…と少し思った。

その日の夜。

塗装作業が一段落した為 ワジマさん達に誘われて遊戯の準備をしているところだ。

ジャラジャラジャラジャラ

「お若いのに麻雀をご存知とは博識ですな レイア様」

「いえいえ、本当に嗜む程度ですよ」

前世でも牌に直に触るのは数回程度しかなかった。基本は、ゲームセンターの脱マーと麻雀漫画で覚えた知識程度しかない為、本当に嗜む程度だ。オートリーチが無いと上がり牌を考えるのだって大変な位だから。

「ははははは、大丈夫ですよ。私達も嗜む程度ですよ」

と、笑いながら答えている。

笑いながら嗜む程度と入ってはいるが、私より麻雀には詳しいし強いだろう。しかし、接待麻雀をしてくれるに違いないと信じてみる。きつと、大人の余裕というやつを見せてくれるんですよね。

「折角の勝負ですし、当番を一つ賭けてみませんか？」

当番？

執事の人達の仕事内容を把握しているわけではないけど…掃除当番や食事当番のことだろう。こういう場で断るのは空気が白けるのは確実！！ Noと言えない日本人としては頷く意外選択肢は用意されていいない。

まさに、公明の罠。

「では、全員の賛同が得られたところで始めるとしよう。ミケ餌当番を賭けて……」

ミケ……どこかで聞いた事があるような気もするが思い出せない。確か、サザ○さんに出てきた白猫がそんな名前だった気がするな……いや、あれはタマだったっけな？ まあ、名前からするに可愛らしい子猫or子犬に間違いないだろう。

しかし、執事の皆さんの顔が結構マジになっている。

たかがゲームだというのに、まるで命懸けのゲームをしているかのような空気が漂っている。なにやら、不吉な気配が漂っている。

私が牌を集めて積み上げる為 手を伸ばした時 一斉に執事の手が伸びた。

シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャ

執事が競うかのごとく、凄まじい速さで牌を自分の手元を集めて積み上げていく。あまりの速さに、呆然としてしまった。一体、何をしているんだ！！

カチャ カチャ カチャ

気が付けば、私以外の人は準備を終えていた。

「さあ、レイア様も早くお準備を。既に勝負は、始まっておりますよ」

こうして、勝てるはずのない勝負が幕を開けた。

・
・
・

数時間後。

何もかも燃え尽きたレイアです。

やはり、ゾルディックの執事は只ものではない…鬼、悪魔、鬼畜！
！ まさに、そんなの言葉がお似合いな人達だと再認識した。

「天和！！」「大三元！！」「国土無双！！」「麻雀初心者でも聞いた事がある役満を連発してきやがる。はっきり言って、あの速さのイカサマに素人の私が付いていけるはずもない。

接待麻雀どころか、完全にカモにされた。そして、向こう二ヶ月間
ミケの餌当番という重要任務を引き受ける事になった。

そして、ミケの姿をみて再度枕を濡らすレイアであった。

第7話（後書き）

レイアは、ミケとは未遭遇で。

原作でのミケの存在を忘れていた設定です。

次話でプロローグ終了です。

次章は、ハンター試験です。

第8話

あれから一ヶ月、ミケに軽く捕食されつつも生きながらえて私の運命を決める日がやってきました。

以前に全員の身体測定もどきを行なった部屋でゾルディック家の家族像のお披露目です。それにしても、世界最強クラスの人物たちが集まりすぎだろう…ここにいるだけで、漏らしそうだ。

しかし、その中にはキルアとミルキが居ないのが謎だ。この一家で私を少なからず私を立ててくれそうなミルキがいないのは正直まずい。イルミの魔の手から私を守ってくれる人が誰も居ないという事になるからだ。

キュツキュ

イルミが針の手入れをしている。その様子は、無表情だが楽しそうな雰囲気伝わってくる。

「あ、あのーミルキ様はどちらに？ 出来る事ならば、当方の命に関わる上ご同席お願いしたいのですが…」

「ミルキは、今療養中じゃ。ここは、ワシが代表して採点してやるう。安心せい…ちゃんとした像なら、約束は守らせるわい」

流石は、ゾルディック家の良心と名高いゼノだ！！

それにしても、ミルキが療養中…そして、キルアが居ない。これは、キルア家出イベント発生した後じゃないか！！ すっかり忘れてい

た。覚えていれば、ミルキの体調が治ったタイミングでお披露目をしたのにな。

「はい、よろしくお願い致します。では、これが私の約二年の歳月を掛けて作り上げたゾルディック家皆様の像です！！」

バサーー

被せていた風呂敷を取った。

私の汗と血と涙の結晶とも言える作品がゾルディック家の方に初めて披露された。

「ほほう、これはナカナカじゃの」

ゼノがヒゲを引っ張りつつ褒めてくれた。

私的に言わせて貰えば、完璧だと思う。像と並んでもらって同じポーズをしてもらえば瓜二つと言って申し分ない。身体的特徴は、完璧にトレースした。流石に、念能力者特有の雰囲気までは醸し出せていないが…像の正面に立つと萎縮してしまいそんな威圧感を感じる事が出来る。

「よい像だな…」

ゼノに引き続きシルバにも好評のようだ。やはり、わかる人にわかるようだ。嬉しい限りだ。

「まあまあ、良くやったわ」

「お母様、これ部屋に飾ろう」

キルアの母親とカルトは、絶対に気に入ると自信があったから当然の結果だ。なんせ、キルアを真ん中にして両方の手を二人が握っている像にしているからだ。キルアの心境をリアルに再現するために困り顔にしたものポイントだ。

ミルク像は、椅子に座ってPCを操作している像にしておいた。まさに、瓜二つだ。ポテチまで再現しておいた。

イルミ像も無論、完璧だ。憎しみを込めて作ったからかもしれないが、他の像以上に禍々しい雰囲気伝わってくる気がする。

「い、いかがでしょうかイルミ様」

「……………」

無言のまま針を磨いている…そして、イルミの手が一瞬ぶれた。

トス

気づけば、足元に針が刺さっているが…あまりの速さに何も見えなかった。もしかして、この針で自害しろと言っことなのか…嫌でござる。絶対に死にたくないでござる。死ぬ時は、嫁の胸の中と心に固く誓っている。

私の涙目を見たゼノが少し微笑んでいた。尊い命が今にも消えそうだというのに何という事だ。やはり、ゼノも鬼畜だと…。誰でもいいから、今すぐミルクをこの場に呼んできてくれ！！この場を乗り切る為ならミルク専属のフィギュア造型師になっても構わんぞ。

私が半泣きになっているとイルミが立ち上がり、こちらに近づいてきた。足音は聞こえないが、死神が一步ずつ近づいてくるのがよく分かる。

ああ…ここで人生終わりなのかな。ごめんね ピトー…君を助けてあげられなくて。

最後に遺言くらい聞いてくれるかな…死ぬ前にお父様とお母様に産んでくれたお礼などなど伝えたいな。後…少しでいいので、像の代金として私が死んだ後に両親の口座にお金を振り込んであげて欲しいな。私が最後にできる親孝行はこの位かな。

「ソレ、あげる」

…え!?

あまりの衝撃的な言葉に脳が着いていかない。混乱している私を華麗にスルーして部屋を退場していった。

イルミが…この針を私に!!???

え、どういう事!? 誰か説明を!!

「ミルも気に入ったようじゃな。言うまでもなく、合格じゃ。よかったのう…お主もこれで自由の身じゃ」

自由…ああ、なんて素晴らしい言葉なのだ。

「ウオ……ウオッシャー……!! 生き残ったぞおー」

「」

周りの視線など気にせず叫んでしまった。

今日ほど、生を実感した日はないだろう。目から心の汗が止まりません。

「そういえば、お前さん。像作成の報酬を全くもらつたらんそうじやの…折角だからこれをやろう。もし、殺したい奴がいたら4割引で引き受けてやるっ」

ゼノが懐から名刺を取り出して私にくれた。

4割引…むしろ、9割引位にしてくださいよ。確か、ひとり殺すのに10億位でしょう？ 私のような一般人が貴方のようなプロを雇えるはずないでしょう！！ などと言えることもなく素直にお礼を言った。

金では買えないコネと言うのは、非常に大事だからね。

「ありがとうございます！！ 機会があれば是非ご依頼させていただきます。 それでは、今日まで約二年間お世話になりました。実家に帰り、ハンター試験を受けようと思いますので これにて失礼致します。…後、帰りにミルキ様のお見舞いに行きたいのですが、どちらに？」

キルアの母親が執事を呼んでくれた。

私は、執事に連れられて部屋を退場しミルキのお見舞いに行った。

こうして、約二年間お世話になったゾルディック家を生きて帰れる事になった。お土産は、地元で売っていたゾルディック饅頭などの地元のお土産を沢山買って帰ったよ。

後、見舞いに行ったミルクから像の報酬のおまけと言って、とても重い箱をくれた。中身がなんなのかは知らないが、きっとイイ物に違いない。

キルアの野郎には、感謝しねーとな。

レイアが実家に帰る前に手ブラでお見舞い着たので即興でフィギュアを数体作らせた。完成度は、相変わらず高い。しかも、短時間で2体のフィギュアを塗装有りで作り上げるとは思ってみなかった。

なんでも、魔法少女をモチーフにしたらしい。暇だったので、どんな魔法少女か聞いてみたら、脱げば脱ぐほど早くなる金髪ロリ幼女と白い悪魔と呼ばれるロリ幼女が周りの迷惑や物的損害を度外視した超絶バトルを繰り返す話らしい。

俺の直感が正しければ、これは儲かる。

『ワジマか、お前は確かジャパン出身だったな？ちよっと、やって欲しい事がある』

『何でも、お申し付けください』

「実はな……」

ワジマに命令した後に俺は、レイアから聞いた話にちょっとした要素を取り込んだ話を書いた。

二ヶ月後の深夜にジャパンで社会現象を巻き起こすアニメが放映されたのであった。その内容は、こんな感じだ。ロリ幼女の鞭打ちシーンや非殺傷とは名ばかりの殺人的魔法戦を繰り返す超弩級の変態アニメと言ったところだ。

タイトル：「魔砲少女 本気狩る ^{マジ}なのは」

原作：レイア

監督：Milky

シリーズディレクター：Milky

シリーズ構成：Milky

脚本：Milky

キャラクターデザイン：レイア

音楽：Milky

アニメーション制作：ボルビック

レイアの知らないところで名前が売れるレイアであった。

第8話（後書き）

これにて、プロローグ完了です。

最後まで読んでいただき有難うございます。

次章からは、ハンター試験編です。

きっと、ゾルディック家での経験が役に立つに違いありません。
レイアが合格することを願っておいてください。

しかし、最終試験どうしようかな…

第9話（前書き）

ハンター試験編に突入しました。

第9話

先月、黄泉の国と言っても過言でもない場所から生きて生還を果たし16歳になったレイアです。

とうとう、原作クラピカと同年代になってしまいました。だが、ゴンやキルアと同年代じゃなくて本当によかった。あんなのと比べる
と萎えるからね。

そして、今日はハンター試験当日！！

両親には、記念受験だから一度だけ受けさせてくれとなんとか説得した。今こそ、道場やゾルディック家での成果が実る時なのだ。

そして先日、二年ぶりに道場に遊びに行って師範代とお話してきました。師範代曰く、運が悪くなければ合格するだろうとお墨付きをいただいた。恐らく、運が悪いというのは念能力者が相手の対戦試合や知識を問う試験でなければといった感じだろう。

まずは、第一関門。

何処にでもあるような定食屋の中へと入った。

「ステーキ定食」

定員の顔つきが微妙に変わった。

「焼き加減は？」

「弱火でじっくり」

ふふふ

事前試験をやらずに一気にここまで来られるのは転生者の特典だな。マトモにやっても、たどり着けるかもしれないが…それは、ゴン達と同じルートを辿った時限定の話だろう。他のルートで来る場合は、どんな試験があるかわからんからね。

奥の部屋に案内され、ステーキ定食を食べつつしばらく待つと地下100階に到着した。

食事を終えてエレベーターから降りるとそこには、むさ苦しいオッサン達で満たされていた。だが、10年心源流拳道場に通いゾルディック家で二年間過ごした私にとって、この程度の雰囲気は飲まれはしない。

「これがあなたの番号札です」

係員から420番の札を渡された。

なぜ、こんな試験会場やキーワードも知っているのに来るのが遅かったのには理由がある。可能な限り目立たない為、一次試験開始直前に到着したかった。後、ゴン達の番号札をずらすのは得策じゃないと思っただからだ。下手したら、私がヒソカの番号札を狙う事になりかねないからね。

ヒソカの番号札を狙うとか考えただけでゾツとするわ。

「新顔だね 君」

背後から人柄の良さそうな小太りの中年男性が話しかけてきた。

ト、トンパきたー！ー！！

私は、お前を待っていたのだよ！！

「ええ、今年はじめでの受験です。よろしく」

「ああ、こちらこそよろしく。俺はこうみえて35回もテストを受けているから分からない事があつたら何でも聞いてくれよ。後、これはお近づきの印」

トンパがカバンから缶ジュースを取り出して私に差し出してきた。私は、それを受け取ると同時に小型の発振器をトンパに取り付けた。この死亡率の高い試験を何度も受験して生き残っているお前を私は高く評価している。要するにだ、お前に着いて行けば死ぬ事はまずない。おまけに、今回に限っては4次試験まではトンパがたどり着く事も知っている。

私の為に頑張って生き残ってくれよ。

「ありがとう。私は、少し疲れたので コレでの飲みながらあちらで休ませてもらうよ」

「ああ、ゆっくり休んでくれ」

隅っこに行き、ジュースを捨てた。始まる時間までは、持っていた荷物の手入れをしておこう。いつ何とき使う事になるかわからない

からね。

数分後。

「ぎあああーっ」

はっ!!

悲鳴がした方を見ると、ヒソカが腕を切断してシーンだった。もうそんな時間か…ならば、今からでも準備運動を開始しておこう。

更に数分後。

「では これよりハンター試験を開始いたします。どうぞこちらへ」

夢にまで出たハンター試験がいよいよ始まった。この試験をクリアしない事には、何も始まらない。

待っているよ ピトー!! 必ずお前を手に入れてみせる。

ザザザザザ

400人近い人数が一斉に移動を開始した。

ここでは、まだ発振器の出番ではない。迷う事の無い一直線の通路だからね。後は、自分のペースで踏破するのみだ。昔の私なら100km近いマラソンなど不可能だったが…今は違う!!

ありがとう 心源流拳法道場！！ ありがとう ゾルディックの執事の人達！！

涙で汚れた枕カバーを変えた回数は数知れないが、今だけは感謝してやるぞ。

おっと、あまり妄想にふけっていると遅れてしまうな。自分のペー
スを守るのも大事だが、何より、主人公一行と同じペースというのが一番ダメだ。原作組と仲良く行動しては、ハンター試験後に再びゾルディックに行く事になりかねない。だから、一定の距離を保つべし。

気合を入れる レイア！！

パン

自分の両頬を叩き 活をいれて、ゴール目指して走り出した。

数時間後。

ようやく、階段まで到着した。流石に、毎日鍛錬していても ここまで走るのは結構体力を消耗した。原作キャラ達は既に登り始めているのを後ろから確認したので、私は自分のペースを守りつつ登りきるまでだ。

さあ、頑張るぞ！！

登り始めて数十分後。

上に登るにつれて、体力切れでくたばったように休んでいる連中を何人も見てきた。正直、実力不足な人達は、ここで脱落しておいたほうが幸せだろう。これからの道は、死亡率が跳ね上がるからね。

お！！

上の方から光が見えてきた。

「到着…つと」

ふう〜

登りきった先には、既に受験者が沢山いた。どうやら、私は最後尾に近かったようだ。おっと、次の試験が始まるまで休んで体調を整えておこう。ここからは、試験官であるサトツのペースに付いていかねばならないからね。だが万が一見失った時には、この発振器が役に立つ。

水分補給をして少し休んでいると辺りが騒がしくなってきた。

そして、一匹の猿が死んだ…全く、キモイ生態系だな。改めて、○樫ワールドに生存する生き物の生態系に疑問を感じた。もっとも、そのような生態系でなければ、私のピトーも現れないのだけどね。

「それでは まいりましょうか。二次試験会場へ」

立派なおヒゲの試験官が走り出した。私はすかさず、試験官の真後ろと陣取った。命懸けのマラソンだ。ここだけは、自分のペースが乱れようとも決して離れまいと心に誓った。だって、死にたくない

もん。

30分後。

ふっ…分かっていさ。

迷子になりました。気が付けば、目の前にいた試験官が居なくなり左右にいた受験生も消えていた。どうしてこうなった…最前列を常に走っていたのに、後ろの方で悲鳴が聞こえた為、一瞬振り返ってしまっただけでこの有様だ。流石は、詐欺師のなんとやら…。

だが、ここで諦めるレイアではない。ちゃんと、こういう時の対策として熟練受験者トシバに発振器を付けているのだから。まだ、そう離れてはいないはずだ。

私は、発振器の目標の位置を確認した。

ザザザ！！

その瞬間、横の茂みから76番のプレートを付けたおっさんが飛び出してきた。

・
・
・

「チエスストーリー！！」

ドゴン

私は、76番の男の懐に飛び込んで手加減無しに正拳突きをお見舞いした。この12年間、ハンター試験の為に修練を積んできた私の腕力は、試練の門を二の扉まで開けられる程に成長している。そのような腕力を持つ人間の拳をいきなり食らった人間は、あたりどころがよくて悶絶するだろう。

「ぐうううううええええええー」

「悪く思つなよ」

76番が苦しむ中、私は早々にこの場を立ち去った。

傍から見たら私が悪人に見えるかもしれないが、それは大きな誤解だ。私の記憶が確かなら、76番はヒソカから逃げ出してきた一人だ。要するにだ、76番がこっちに来たということはヒソカが私の方に来るといふ事だ：RPGで言うならばMPKモンスタープレイヤーキラーと言つてもいいだろう。

マジで迷惑だ：死ぬなら一人で死ね。

よって、私はヒソカに生贄を差し出し逃げる事にする。そう、全力で！ 人間命懸けになれば信じられない力を発揮するというのが今がまさにそうだ。この足の速度ならば、ミケの餌当番になっても捕食される事は無かつただろう。

10分後。

「はあはあ〜」

一心不乱に走り続けたおかげで、全身汗だくになった。しかし、おかげで生き物に騙されることなく二次試験会場へと到着した。

「の、のどが渴いたぜ」

本当ならもっと楽にこられるはずだったが、ヒソカ絡みはやはり不確定要素がおおいな。だが、ヒソカに目を付けられないだけ僥倖と言える。全く、自分の才能のなさに感謝したい位だわ。

第9話（後書き）

内容は、漫画に沿って書いていきたいと思います。

第10話

現在、二次試験真つ最中のレイアです。

勿論、お題は「豚の丸焼き」だ。しかも、二次試験会場のビスカの森にいる豚は世界一凶暴と言われている程だからタチが悪い。本当に、試験官はいい性格をしている。

「さーて、豚は何処かな」

さつきから、探して入るのだが…一向に豚が見つかりません。正直、この豚如きには遅れを取る気はないのだが、そもそも獲物がいないとか酷すぎる。

これでも、ブ…じゃなかったミルクとは仲がいい？から豚ともお近づきになれると思ったのにな。

トドトドトド

少し離れた場所で地響きがした。

これは、間違いなく豚の足音だ。私は、すぐさま足音がする方向へ走った。辺にいた受験者も同じ獲物を狙っているようで一気に集まってきた。

私が、現地に到着した時には既に豚達は壊滅状態だった。ゴン達が豚の弱点を大声で叫んだせいで全員が急所狙いで一網打尽にされている。

なんてこった。

しかし、まだ豚は残っている。当たりを見回して、なんとか受験者の餌食になっていない豚を発見した。ほかの受験者より早く、そして確実に仕留める！！ 豚目指して一直線で走った。

豚も私に気づいて突進してきた。

自ら、倒されに来てくれるとは、ありがたい。せめて、苦しまないよう一撃であの世に送ってやろう。拳に力を込める。

「未来の為にしねー」

トストトス

ドーーーーン

私の拳が豚に届く前に、はるか後ろから何か投擲された。その形状は、ヒジヨーに身に覚えがあり、かく言う私も一つ所持している。決して、忘れていたわけじゃないが…出来る事なら不干渉で貫きたかった。

「二ヶ月ぶりですイ…ヒイ」

「……………」

振り返り挨拶をしようと思ったが、名前を言おうとした瞬間 自分が死ぬシーンが見えた。なにやら、口を力カクカク動かしているが何を言っているかわからない。だが、名前を口にするなという事だ

ろう。

そして、イルミは私の獲物だった豚をもち去って行った。

・

・

・

「私のブタさんが…こうなりゃ、最終手段だ」

既に豚の軍団は壊滅、これから新しい豚を探すにしても時間がかかる、試験官が食べられる数には限界がある。

ならば、取る手段は一つ！！

二次試験会場にて。

会場には、豚が焼けるいい匂いが充満している。

私は、その中で獲物を探していた。言うまでもなく、豚を横取りする相手をね。今回の試験は、豚の丸焼きを試験官に食べさせる事だ。その過程までは、指示されていない。

やはり、全員が豚を一人で狩る事が出来るのでそれなりに腕が立つ。その中から、私の実力で確実に排除可能で、騒がれない人物に目を付けた。

私は、気配を殺して背後に回り込んだ。そして、一気に首を締めた。

ギリギリギリ

「安心しろ。殺しはしない…ただ、試験が終わるまで寝ていてもらおう」

「ふむ…あ」

ドサ

締め落とした受験者を森の中に隠した。

どうせ、この受験者は最後まで残れないのは明白。ならば、未来ある私とそのチケットを有効活用させていただこう。

さて…いい具合に焼けたし、試験官様にご馳走しに行きましょう。

二時試験会場のプレハブ内で。

いやー、それにしても本当に70匹の豚の丸焼きを食べるとはね。一体どんな、念能力なのだろう。もしかして、王と同じ食べる程強くなるのかじゃないよね？

「あたしは、ブラハと違ってカラ党よ！！ 審査も厳しくいくわよー」

厳しくね…ハンゾーのせいで怒ってしまい誰も合格にならないから、厳しかろうと優しくかろうと関係ないのだけだね。一応、表向きは頑

張っておこう。

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよ!!!」

ザワザワ

ほとんどの者が顔を傾げている…無論、私も演技をかねて傾げておいた。目立つのは得策じゃないからね。

「それじゃ、スタートよ」

全員が一斉に厨房に走った。

さて…私は、どうしようかな。無駄な努力をするのも気が引ける。かといって、何もしないと試験官に怪しまれる。ならば、適当に料理を作ってこの場を乗り切るかな。

「えーと、冷蔵庫には何が入っているかな…」

調味料、野菜、果物、肉と結構マトモな材料が揃っている。当然の事ながら、魚は入っていない。

おろ…なんだ いい物があるじゃない!!

素材の中に卵を見つけた。

寿司といえば、一般的には魚だが…前世では、天ぷらとかカルビとか色々な寿司ネタがあった。当然、そんなお寿司は邪道だと思う。しかし、卵だけは別だと思っている。卵のお寿司美味しいからね。

それに、卵焼きならばお母様と一緒によく作ったな。味付けが母とそっくりとお父様も褒めてくれた。一般家庭の料理程度では満足しないだろうが…まあ、作っておいて損はないだろう。

数分後。

「魚あ！！ お前 ここは、森の中だぜ！！」

私が、黙々と卵焼きを作っているとレオリオの大声が聞こえた。

あいつ絶対狙ってやっているだろう。わざわざ、ヒントを大声で叫ぶとかどうかしてやがる。それにつられてハンゾーも過敏に反応したのがマズかったのだろう、受験生が一斉に外に飛び出していった。

そして、私一人だけ残された。

「これで完成と…」

出来上がった卵焼きを綺麗に切って、ご飯の上に載せた。忘れずに海苔も巻いておいた。安っぽいお寿司だが…これも間違いなくお寿司には間違いないだろう。

誰もいないうちに一度くらい味見してもらっておこう。やる気が無いわけじゃない事をアピールしておこないとね。

「お待たせしました。これがスシです」

「へーあなたは、魚だけがスシじゃないって知っていたんだ。本当なら、魚が良かったのだけど、まあいいわ 試食してあげるわ」

ここの生態系の川魚を所望するとは、なかなかゲテモノ好きなんだなこの人。

メンチが私のお寿司を掴み口へと運んだ。

モグモグモグ

「まるで、ダメね。スシを知っていた事は評価するけど、料理の腕前が全然ダメね。そもそも、スシの卵焼きと言つのはね……………」

・
・
・

な、長い…なんで、卵焼き一つで3分以上もお説教を受けないといけないのだ。そんな、素人同然の連中が作った料理にこの人は何を求めているのだよ。

「よって、不合格よ。作り直していらっしやい」

「了解です」

予想通りとはいえ、不合格。

まだ時間もあるし、他の受験生を見習って魚で寿司を作ろうかな…いや、確かこの後ネテロ会長が来るよな。ならば、メンチの裸婦像でも進呈すれば喜ばれる事は間違いないだろう。

この試験を通過できれば時間は、たっぷりありそうだし…1 / 10

等身位の像ならいけるだろう。今のうちに、じっくり観察させてい
ただきましよう、その肢体をね。

きつと、完成品をプレゼントしたら印象値が上がり最終試験で対戦
回数を多く割り当ててもらえるだろう。

俄然やる気が出てきたぞ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889y/>

まだ見ぬ嫁の為に

2011年12月7日08時14分発行